

## 歴史と文化をふまえた震災復興に関する日本とトルコの比較分析

Comparative analysis on earthquake disaster reconstruction  
between Japan and Turkey considering their histories and cultures

吉川 耕司 (YOSHIKAWA Koji)

本研究では、1999年の震災被害を受けたトルコ・ドゥズジェ市を対象とした調査と分析を、歴史と文化をふまえて領域横断的に行うことで、日本の災害復興政策と研究の深化に寄与しようとした。具体的には、震災時および復興過程における政策、被災状況、住民の行動と発想、建築様式や都市形態に関して、既に行った被災直後の調査項目を、時系列分析を行えるよう再調査するとともに、地域の歴史の変遷や文化的背景に関する情報を加えて防災・復興制度や住民の行動・意識への歴史・文化的な影響を明らかにし、これと日本の状況を対比することで、両国の比較分析の形で取り纏め、歴史・文化・地域性を重視した防災と復興のあり方を提示することを研究目的とした。

研究活動は、①現地調査により、市域の物的側面と、住民の被災行動や災害・復興への意識に関する調査結果を得、既存の調査結果と合わせ、トルコの震災復興過程の時系列分析を行う。②文化と歴史に関する調査結果を加え、これらが復興政策や住民行動・意識に与えた影響を分析する。③日本との比較分析を行い、両国の状況を対比的に記述した比較リストを作成する、との方針で進めた。

①に関しては、平成27年4・5月、平成28年11月、平成29年12月、平成30年3月に現地を訪れ、建築物・土地利用・道路（交通）に関する調査を行った。被災前・被災直後・現時点の変化の確認、固定資産台帳より建物復旧年度を調べることによる時空間データ化、新市街地～都心間の幹線道路の交通調査を行うことができた。

②に関しては、平成27年度に記述資料による歴史調査として、19世紀の『収入台帳』に関する文献調査を行った後、平成28年度以降は、現地調査の結果を加えた分析を行った。

③に関しては、両国の状況を対比的に記述したうえで、これに文化的・歴史的要因に関する分析を加味して探索的な考察を行った。

研究の成果として、発災直後の対応において、避難所の設営に注力する必要がなかったこと、テント村の短期の造営にとどまり仮設住宅の建設が不要であったこと、水や食料の公的機関による供給や支援物資の配給にそれほどの大規模性が必要でなかったこと、また、復興政策の中心が市街地外縁部への新興住宅建設であったこと、といった特徴的な方法に関し、農耕に全面的に頼らない民族性、土着性を重視しない建国の経緯、イスラム教にもとづく相互扶助の精神とそれによるコミュニティ形態が相まって成立可能性を高めているという、文化・歴史の政策への影響に関するメカニズムを明らかにすることができた。

以上のように、分野別研究組織としての支援を得ることで、研究目的を達成し一定の成果

をあげることができた。さらに現地訪問時に2回にわたり、市役所とドゥズジェ大学が主催したシンポジウムにおいて調査結果の発表を行い、あわせて本学と基本協定を結んでいる同大学との研究交流を行うことができた。